

Question

1

高血圧は若い人でも多いの？

Answer

高血圧は日常診療で最も患者数の多い疾患で、高血圧はわが国の国民病である。高血圧は診察室血圧で収縮期血圧（SBP）140 mmHg 以上、かつ/または拡張期血圧（DBP）90 mmHg 以上、あるいは、降圧薬服用がある場合に診断される。また、家庭血圧測定では SBP 135 mmHg 以上、かつ/または DBP 85 mmHg 以上が高血圧と判断される。JSH2014 では 2010 年の循環器疾患基礎調査成績より、わが国の高血圧有病者数は 4,300 万（男性 2,300 万人、女性 2,000 万人）と記載され、30 歳以上の日本人男性の 60%、女性の 45% が高血圧であるとしている。JSH2009 での記載より 300 万人の増加となっている。この高血圧有病者の増加は高齢者人口の増加によるものと考えられる。

原因が同定される二次性高血圧は 5% 程度であり、それ以外が多因子の成因による本態性高血圧となる。環境や遺伝により蓄積された加齢変化は解剖学的・生理学的な血管、血行動態の変化をもたらし血圧は上昇する。本態性高血圧は加齢により有病率は増加し、4,300 万人の高血圧患者のうち、60 歳以上の者が 63% を占める。高血圧は高齢者の疾患である。

若年者の高血圧

図 1 に 20 歳以上の対象について性、年代別の高血圧者数を示した¹⁾。CQ1 の若年者の高血圧の頻度に関してはこれが回答となる。高血圧者数は男女で 20 歳代では 120 万人、30 歳代では 230 万人、40 歳代では 430 万人、50 歳代では 840 万人であり、どの世代でも男性の頻度が女性に比し 1.5~5 倍多い（図 1）。2010 年の NIPPON DATA 2010 の解析では 20 歳代男女では同世代人口の 10% 未満だが、30 歳代男性では同世代人口の 23% 程度、同女性では 6% 前後、40 歳代男性では同世代人口の 44% 程度、女性では 13% 前後、50 歳代男性では同世代人口の 58% 程度、女性では 38% 前後である。経年変化では、高血圧有病率は、女性では各年齢階級で低下傾向がみられるものの、男性の 50 歳代では上昇傾向である（図 2）。

血圧値の経年変化をみると、収縮期血圧の平均値は男女のいずれの年齢階級においても過去 50 年間で大きく低下している（図 3）。他方、拡張期血圧

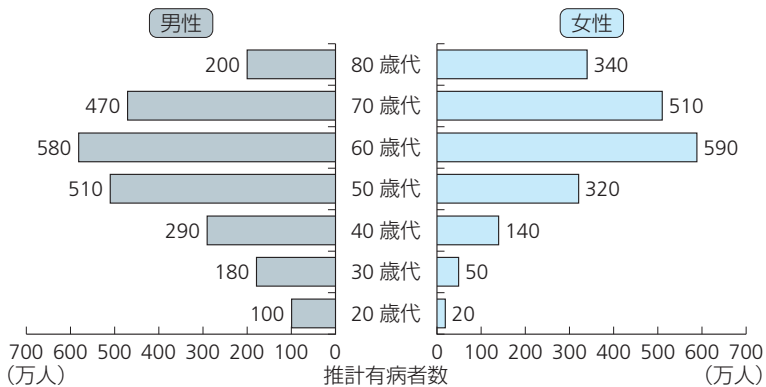


図1 ■わが国の高血圧有病者推計数
(性・年齢階級別)

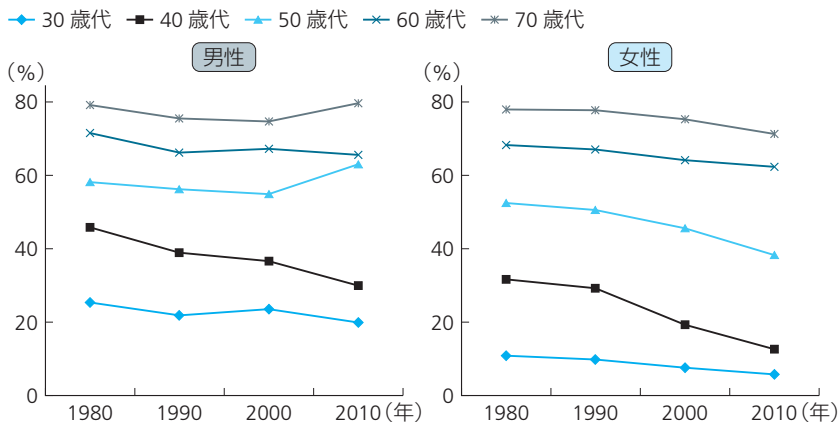


図2 ■性・年齢階級別の高血圧有病率*¹の年次推移 (1980~2010年)

第3次循環器疾患基礎調査 (NIPPON DATA 80)、第4次循環器疾患基礎調査 (NIPPON DATA 90)、第5次循環器疾患基礎調査、NIPPON DATA 2010より*²

*¹ 収縮期: 140 mmHg 以上または拡張期: 90 mmHg 以上または降圧薬の服用 (2000年・2010年は2回測定の内1回目)

*² 第6次循環器疾患基礎調査は実施されず、厚生労働科学研究 (指定研究) としてNIPPON DATA 2010が実施された。

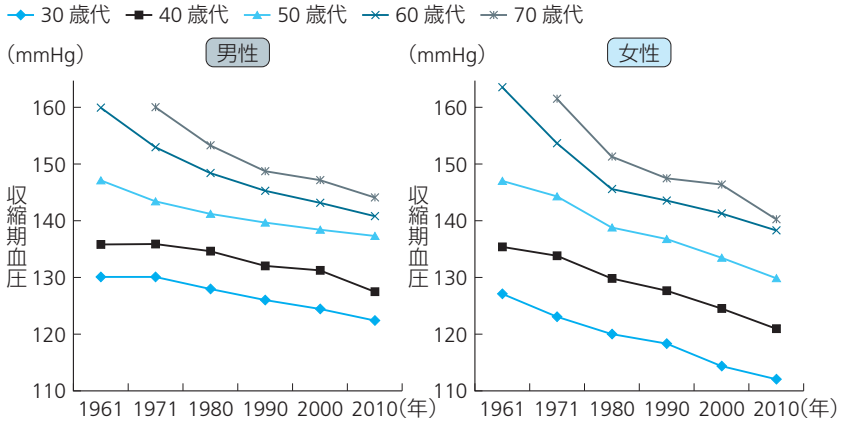


図3 ■性・年齢階級別の収縮期血圧平均値 (mmHg) の年次推移 (1961~2010年)

第1次成人病基礎調査、第2次成人病基礎調査、第3次循環器疾患基礎調査 (NIPPON DATA 80)、第4次循環器疾患基礎調査 (NIPPON DATA 90)、第5次循環器疾患基礎調査、NIPPON DATA 2010より

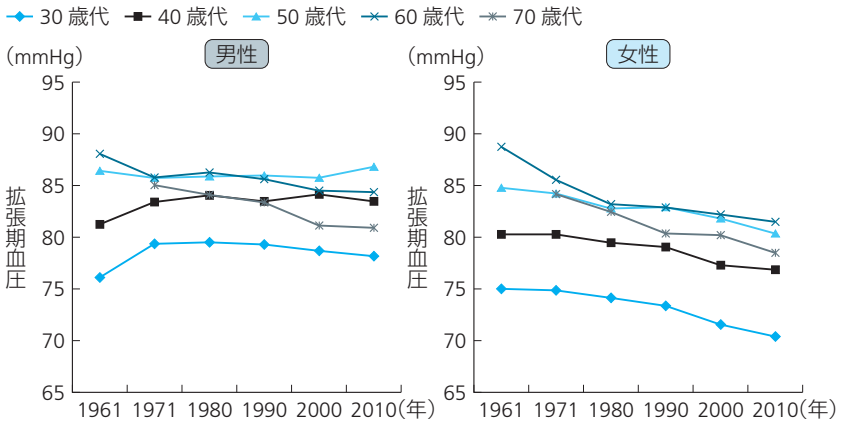


図4 ■性・年齢階級別の拡張期血圧平均 (mmHg) の年次推移 (1961~2010年)

第1次成人病基礎調査、第2次成人病基礎調査、第3次循環器疾患基礎調査 (NIPPON DATA 80)、第4次循環器疾患基礎調査 (NIPPON DATA 90)、第5次循環器疾患基礎調査、NIPPON DATA 2010より

は女性ですべての年齢層で低下しているが、男性では30~50歳代の拡張期血圧平均値は過去50年間での低下は明らかではなく、高血圧有病者率の変化と同様の傾向を示している (図4)。過去50年間に国民皆保険により医

療機関への受診が容易になり、同時に有効な降圧薬が上市されたこと、さらに減塩の有効性が普及したことが、国民全体の高血圧有病率低下、平均血圧値の低下傾向に寄与したものと考えられる。しかしながら、50歳代を中心とする男性の高血圧有病率、拡張期血圧に低下がみられないのはこの群で肥満者率の増加、平均BMIの上昇が関与しているものと考えられる。

以上、高血圧は高齢者の疾患ではあるが、若年者でもある一定以上の患者数が存在する。また、若年者高血圧の特徴として、二次性高血圧が多いことがあげられ、若年者で治療抵抗性高血圧をみた場合は、二次性高血圧を疑うことが必要である。

参考文献

- 1) 日本高血圧学会高血圧治療ガイドライン作成委員会. 高血圧治療ガイドライン 2014. 東京：ライフサイエンス出版；2014.